

筑波大学日本文学会会報

第9号

昭和59年12月

古典とのつきあい方一案	谷脇理史	一
研究室だより		四
卒業生だより		五
日本文学研究室教官学生名簿		十四

古典とのつきあい方一案

谷 脇 理 史

もはや三十年も前のことである。田舎の高校に入学したばかりの最初の国語の時間、簡単な頭注のついた『竹取物語』一冊を副読本として与えられている我々の前に、柔道五段、もと配属将校で時にビンタを飛ばすという噂の高い、四十五、六の教師が現れた。開口一番、「これは、皆もよく知っているかぐや姫の話だ。大変面白い。古文だって日本語だ。読めば分かる。分からんと思うから分かんのだ」というようなことを云ったかと思うと、我々に本文の第一ページを開けさせ、音吐朗々、「今は昔……」と読み始めた。

二分、三分、ゆっくりと読み進めて、いっこうにやめる気配がない。時々、簡単な注を加えたり、「どうだ、面白いだろう」、「話は、ここからが面白くなる」といった合いの手が入ったりするが、朗読は延々と続いて行く。ページを操る時小休止を置いて教室中をじろりとにらみ渡し、我々がページを操るのを確認して、また読み続ける。こちらは入学早々、敵は名だたる恐持ての教師である。四、五十分、朗読される本文を仕方なしに目で追っているうち『竹取物語』の半分くらいまで来たところで、第一回目の授業は終わった。

第二回目は 同じような状態で後半部が朗読され、「どうだ、面白いだろう。やっぱり古典は、何とも云えずいいなあ。来週からは諸君に読んでもらう。朗読の練習をして来い」で終り、次回からはまた冒頭に返り、我々の下手な朗読を苦虫をかみつぶしたような顔

で聞きながら、時に叱責し、時に注や訳を加えて最後まで読み上げさせた。その間、三回くらいであったろうか。生徒のたどたどしい朗読が終った後、「ともかくいいものはいいい。そのうち感想でも書いてもらうから、よく読んでおくように」、これで、『竹取物語』の授業は終りであった。何となく分かったような気もしないではなかったが、何がいいものはいいいだ、といった反撥が、生意気盛りの我々の心の中にあつたことも事実である。煙にまかれたような感じが、今も記憶の中にあざやかに残っている。

これが、私の古典との出会いということになるが、今思えば、まことに乱暴な話である。昨今の高校で、こんな授業をやる教師はいないだろうし、それを押通せるだけの勇氣を持つ恐持ての教師もいないだろう。しかし、解説抜きで、ともかく読んでみる、読めば分かるところもあるという信念から、遠くて無縁のものと考えていた我々の古典観を、まず一掃しようとした恐持て教師のこの手は、少くとも私にとっては有効であつたように思える。何でもともかく解説抜きで読んでみる、読めばそれなりに面白い、そんな体験の積み重ねが、読むことの楽しさを教えてくれ、それが、私の古典とのつきあい方となつたようなのである。

最近、私の知人の編集者はよく云う。古典ものは、ある程度は売れるんです。しかし、あまり読まれてはいないようですね。どうすれば読んでもらえるでしょうか、と。

確かに、昨今は、日本文学専攻の学生が万をもって数えられ、カルチャー・センターの古典講座に少なからぬ女性たちが集まる時代である。解説つき、注釈口語訳つきの親切な古典ものが、ある程度売れるのも故なしとしない。しかし、解説で分かつたつもりになり、一応読んだつもりになることが、本当に読んだことになるのかどうか。何事にも簡便を尊び、軽薄短少・解説万能の当世であることは、私も十分に承知している。しかし、そのような時代であればある程、我々は、解説抜き、注釈抜きで作品そのものを読み、何かをつかみとる意欲や姿勢を持つ必要があるのではないか。

古典ばなれが云われ始めてから、すでに久しい。だが、見方を変えれば、現代ほど、古典の入門・解説書や全集・叢書がはらんしている時代はないのである。古典は難しい、それゆえに解説・注釈がいる、親切・丁寧であればある程よい、そんな考え方が、逆に古典ばなれを生む一因となっているようにも思える。解説抜き・注釈抜き、えい、ともかく読んでやれという蛮勇を持つことが、解説万能の当世、古典とつきあう一つの有効な方法であるように思うが、いかがであろうか。